

## は じ め に

この調査報告は、佛教大学社会学研究所の西陣地域研究の一貫として行われた、柏野学区の調査研究をまとめたものである。私たちが「西陣の社会学的研究」として、西陣学区に最初の実地調査に入ったのは昭和57年であるから、すでに丸7年を経過したことになる。当時、西陣の産地としての「空洞化」がしきりと叫ばれ、織機の打ち壊しなどが新聞で大きく取り上げられていた。その「空洞化」も「定着」してしまったのだろうか。近ごろはあまりこの言葉を耳にしなくなったようである。

西陣は西陣織をふるくから織ってきた町で、そこがあたかも一つの工場であるかのように、機を織る仕事のなかで地域が成り立っていた。したがって、近隣でのならわしやしきたりの多くは、機によって規定されていたと考えられる。しかしここに、「空洞化」といわれるような製織の地区外依存ではすまされないほどの和装需要の減少化傾向は、土地投機に重なって、この西陣の町をいまだかつてないほどの変化にさらしている。

「産地の空洞化による地域社会の変容」を基本テーマに掲げた私たちの社会学からの西陣研究は、西陣の社会関係として規定されるであろう、まさに「西陣らしさ」に接近することであった。この研究課題に向けて、調査チーム・メンバーがそれぞれの関心に基づいて行ったヒアリング調査を別にして、共通した調査票によるアンケート調査を、私たちは合わせて5回行った。世帯主と個人を対象とした調査をそれぞれ一回づつ、西陣学区と柏野学区で行い、さらに西陣地域と私たちが想定した領域の17の学区の

なかから西陣織との関わりが比較的薄いと思われる学区を除いた13学区で、個人を対象として一回行った。すでに西陣学区の二つの調査と全域調査については、一定の報告書にまとめられており、残された柏野学区の二つの調査をまとめることがこの報告書の主要な課題である。

西陣が研究所の機関調査にあげられ、スタッフが決定されたとき、「西陣」といった歴史からくる「重さ」が、そのままメンバーの「気の重さ」につながったことは事実である。しかし、社会学からの地域研究としては、それほど着手されてはこなかったことと、何よりもわが大学が西陣に接していることが、私たちの調査研究に対する「意欲」になったこともまた事実である。

西陣といっても西陣織生産への関わりは、一般に西陣といわれている地域のなかでも一様ではなく、どこをとって「西陣」というのか、西陣学区の調査に入っただけではわからなかった。しかし、「西陣らしさ」も、調査を広げ、比較研究するなかでおぼろげながらしだいに明らかになってきたように思う。柏野学区についてのこのまとめは、単に柏野学区の調査結果をまとめたものではなく、これまでまとめてきたもののうえにたって、できるだけ私たちの西陣調査全体を視野にいれてまとめるよう努力してきたつもりである。しかしこれは、データに即した調査報告の域をでるものではない。したがって、この研究チームに参加したメンバーが調査データを自らの研究関心に即して再構成してまとめる作業はまだ残されている。これは改めてまとめて公にしたいと考えている。

たびたびの調査にもかかわらず、面倒がらず  
に気持ちよく応じてくださった町内会のみなさ

んをはじめとする多くの方々に、こころより感  
謝するしだいである。

## 調 査 の 方 法

調査の方法は第3次調査、第5次調査とも  
に、訪問によって調査票の配付・回収を行う留  
置アンケート調査法によった。

第3次調査のサンプリング作業は昭和60年2  
月20日～23日の4日間、京都市北区役所住民票  
に基づいて行い、現地調査は昭和60年3月1日  
(金)～3日(日)に実施された。

第5次調査のサンプリング作業は昭和61年2

月21日～24日の4日間、京都市北区役所選挙人  
名簿に基づいて行い、現地調査は昭和61年3月  
7日(土)～9日(月)に実施された。なお両調査  
とも調査票の配付および回収作業は佛教大学社  
会学部学生の協力を得て行われた。

両調査の対象サンプル数および有効回収サン  
プル数は別表のとおりである。

(谷口浩司)

表 I-1 西陣調査(柏野学区)のサンプル数、回収サンプル数、回収率

	学 区	サ ン プ ル 数	回収サンプル数	回 収 率 (%)
第 3 次	上 柏 野	394	290	73.6
	中 柏 野	514	392	76.3
	下 柏 野	311	238	76.5
	計	1,219	920	75.5
第 5 次	上 柏 野	285	241	84.6
	中 柏 野	415	332	80.1
	下 柏 野	249	196	78.7
	計	946	769	81.1